

スタンダール研究会会報 (1996) No.6

1996.5.31

○研究会発表要旨 (第13、14、15回) -----	1
○国際学会: "Stendhal, imaginaire et politique", 26-28 avril 1996, Herstmonceux (Angleterre)報告 -----	8
○会員研究活動報告 (1993年4月-1996年3月) -----	10
○会員名簿-----	14
○編集後記-----	15

Écriture et dessin

— Reconsidération sur les dessins manuscrits de Stendhal —

Kazuko IWAMOTO

Pour lire l'histoire d'un texte et l'émergence d'une œuvre, c'est-à-dire pour descendre au secret le plus profond d'un texte, les études génétiques prennent de plus en plus d'importance. Nous avons déjà tenté d'adopter cette méthode pour les manuscrits de Stendhal, surtout ceux de son autobiographie uniques par le mélange de l'écriture et de la grande quantité de dessins. En se fondant sur nos articles précédents et aussi sur les dernières recherches dans ce domaine, la question que nous posons ici est : Pourquoi Stendhal a-t-il éprouvé le besoin de dessiner, en particulier des plans et des relevés topographiques?

D'abord, l'action de dessiner devait être un (plaisir) qu'il prenait pendant les pauses où il n'écrivait pas. Car on peut considérer le dessin comme un retour à la (source) de l'avant-écriture à savoir avant l'établissement de (règles). Stendhal a ainsi créé une sorte d'écriture figurative. Les (autoportraits), dessinés autrefois de la façon réaliste sur son cahier d'école, sont si simples qu'ils deviennent souvent des taches ou des points sur les manuscrits de *La Vie de Henry Brulard*. Les plans et les relevés topographiques y sont aussi une (écriture figurative) tout à fait unique, autrefois acquise comme une technique institutionnalisée. Ces trois types de dessins sont finalement liés aux souvenirs suivants : ceux des exercices de l'école centrale de Grenoble (et par extension de l'école polytechnique), ceux des lignes de ses dessins répétées, et enfin ceux des cartes de la ville qu'il a eu l'occasion d'observer pendant son enfance.

Ses dessins placés dans son manuscrit, lignes de (plaisir), sont l'expression d'un retour à la matrice. D'autre part, comme reflet de la dénégation et du dépassement du Père, c'est-à-dire comme signes hiéroglyphiques dans un sens, ils symbolisent ainsi le complexe d'Œdipe, qui n'a été discuté jusqu'à présent que dans le contexte de l'écriture.

『赤と黒』における回顧の瞬間をめぐって

杉本 圭子

スタンダールは、自らの過去を記録することに非常に執着した作家である。青年時代の日記から晩年の自伝に至るまで、彼はつねに過去をふり返ることによって「自分は何者であったか」を追求し続けた。特に自伝は過去を再現するうえでの独特の方法論に支えられており、この点についての研究は多くなされてきている。が、今回はあえて対象を長篇小説に限定し、作者の似姿であるといわれる登場人物たちの作品内での回想行為について、その内容や、回想の行われる状況などを調べた。その際、作者が回顧という行為を通じて登場人物をいかに造型しているか、また物語をいかに構築しているかを探ることに重点をおいた。

『赤と黒』は主人公ジュリヤンの人格の発展を時間軸に沿って描いているという点で、いわゆる「教養小説」的な構成をしている。小説の舞台はヴェリエール、ヴェルジーからブザンソン、パリ、そして牢獄へと移り変わり、それとともにジュリヤンの身分も材木屋の息子、レナール家の家庭教師、神学生、ラ・モール氏の秘書、死刑囚というように変わっていく。その過程において、低い身分に生まれつき、社会とたえず戦うことによって、自分にふさわしい地位を得るという野望を実現しようとするジュリヤンの目は、ほとんど常に未来へと向けられる。自らの思い描く未来のために、いま現在何をすべきか、いかなる障害を克服すべきかということが、彼の最大の関心事となるからである。このような作品において、主人公が以前経てきた段階のことをふりかえる機会は限られていると推測されるが、実際はどうであろうか。

すぐに思い浮かぶのは、小説の末尾の処刑の瞬間、レナール夫人とともに過ごしたヴェルジーでの幸福な思い出が、映画のフラッシュバックのようにジュリヤンの脳裏によみがえる場面である。この場面に限らず、ヴェルジーの思い出は、小説全体の中で特権的な位置を占めている。レナール邸から神学校へ、次いでパ

りのラ・モール邸へ移ったジュリヤンの心の中に間欠的に呼び戻され、しばし安らぎをもたらすのは、この時期の記憶である。幼年時代の記憶や、神学校での経験については、わずかに言及されるのみである。

ただし、ジュリヤンが致命的な犯罪を犯すまで、主人公を突き動かす「野心のベクトル」が、彼を始源のユートピアへと誘う「幸福のベクトル」を上回ることはまれである。それでも、後者が前者を大きさにおいてしのぐ揺り戻しの瞬間は、各段階に意図的に、戦略的に散りばめられ、獄中での主人公の最終的な回心を準備するものであった。主人公が物語の中で劇的な価値転換を経験し、それを機に過去を振り返るという構成は、部分的には『アルマンズ』『リュシヤン・ルーヴェン』『パルムの僧院』にも共通している。その際、主人公たちは過去の自分、すなわち真の愛情に気づけなかった時期の自分を否定するわけだが、これこそが「教養小説」の到達点となっている。この意味で『赤と黒』は、思い出に導かれて主人公が真の幸福に到達する物語、と規定することができよう。

こうして、ジュリヤンの回想は、来るべき死の意識に裏打ちされた、明確な自己認識に至るための省察の機会として設定されており、これは自伝を執筆する際のスタンダードの姿勢とも重なる。むしろ、それが理想であったといったほうがよいかもしれない。『アンリ・ブリュラーの生涯』の各所にみられる、「汝自身を知れ」という言葉に対する答えとなるような書物を自分は著すつもりだ、というマニフェストからのたえざる逸脱こそが、真にスタンダード的といえるものなのだから。

Lucien Leuwen から *La Vie de Henry Brulard* への政治的文脈 (柏木 治)

Lucien Leuwen (以下 LL) 執筆の放棄は、従来その小説構成上の困難を理由とするのが一般的であったが、近年、政治状況の変化にその直接的原因をみようとする立場が目立つ。M. Crouzet、A.-M. Meininger の両者はいずれも、Fieschi による Louis-Philippe 暗殺未遂事件を端緒として成立したいわゆる「九月法」les lois de septembre が、政治的にみてきわめて危険度の高いこの小説の出版を断念させた、という見方をとっている。実際、Stendhal がこの小説を書くにあたって「四月事件」(1834年4月に各地で起きた一連の蜂起)に大いに触発されたのは事実であり、小説中でもこの事件に何度も触れながら、現市民王政を随所で揶揄しているのはよく知られている。また、この小説の口述筆記が放棄された(1835年9月23日)のは、国王による「九月法」批准から二週間後のことであり、当時の書簡の消印からみてパリ=チヴィタ・ヴェッキア間の郵便所要日数が平均二週間弱であったことから、法案可決を知った日付と放棄のそれはほとんど重なると考えてよい。

ところで、LLを放棄した二ヶ月後、すなわち11月23日に*La Vie de Henry Brulard* (以下 VHB) は開始されるが、LLの断念を政治的原因によるものだと考えれば、小説で中絶された体制変化に対するいわば政治的欲望がそのまま形を変えて自伝に流入したと考えられなくもない。実際、この自伝の大きな特色のひとつは、過去の出来事の合間に現在のさまざまな事件が挟み込まれることであり、ロシア皇帝 Nicolas Ier とならんで槍玉に挙げられる Louis-Philippe、「四月事件」のリュネヴィルでの蜂起未遂事件に対する判決、Fieschi 処刑といった話題が繰り返し書き込まれているのである。自伝において言及される actualités の多くが反政府行動に関わるもの、もしくは政府批判であり、明示的あるいは暗示的に書き込まれた「現在」の刻印に焦点をあわせて読めば、この自伝があたかも現体制崩壊への政治的欲望が引き金になって書かれているようにさえみえてくる。幼少期の回想は、それが「現在」を説明する原理の探求でありながら、他方で、その回想の様態そのものがむしろ「現在」の状況によって大きな作用を被っていると考えなければならない。よく言われるように、VHBの大きなテーマのひとつは父と子の対立(父親殺し)であるが、このエディプスの関係は作者の深層に関わっているというよりはむしろ、体制崩壊への希望がたたれ、行き場を失った欲望に由来すると考えられるのではないか。少なくとも自伝における父に対する憎悪や自己の残忍さの誇張にみられる作為性は、「いま」の現実に対する不満と考えあわせないかぎり、実際の証言からは説明のつきにくいところが多分にある。

本発表では、随所に書き込まれたこの現在——とくに、執筆中の12月に出された四月事件の判決、なかでもリュネヴィル事件の主犯格のひとり Thomas に関する記述、そしてこの事件の裁判にあたった貴族院議員(帝政時代の元将校たち、および同郷人 Félix Faure、Edouard Mounier) に対する激しい批判等——を拾いながら、自伝の動機づけがいかに現在の政治的状况に関わる場所が大きいかを示そうとしたものである。新しい体制の到来を予感しつつ LL は書かれたが、おそらくこの期待がほとんど実現不可能となった時点で、体制変革の願望は、Napoléon への郷愁と交錯しながら一層の象徴性をおびて VHB のなかに受け継がれた。この欲望は、のちに大公暗殺 (*La Chartreuse*) というかたちで神話的に解放されることになるが、いずれにしても、LL における政治的関心はかたちを変えてそのまま VHB に流れ込んでおり、こうした文脈からみるかぎり、この自伝は無意識の深層から呼び覚まされる「家族小説」的自伝というよりは、52歳の Stendhal が現在直面している政治的現実を幼少の家庭に投影させた自伝として読めるのである。

『赤と黒』には、Classiques Garnier版(1977)の注(P.-G. Castex)によれば、ラシーヌの『フェードル』の引用と思われる箇所が5箇所ある。しかし、この事実から、『フェードル』と『赤と黒』の間に、重要な内容上の関連があると考えた研究者は、Castexを含め、これまでのところ存在しないようである。Castexは(“LE ROUGE ET LE NOIR” DE STENDHAL)(S. E. D. E. S., 1970)で、『フェードル』からの引用を論じた際、結局、場違いな引用であり、せいぜいパロディ的な意図が感じられるだけであり、作者は文学的教養を披瀝する誘惑に負けたのだ、と結論している(p. 88)。しかし、この結論は単純すぎると思われる。Castexは、『フェードル』と『赤と黒』の内容・文体を綿密に検討した上で、その結論に達したとは思えない。確かに、『フェードル』と『赤と黒』の内容は、一見大きく違っていて、スタンダールの引用は、唐突なものに見える。しかし、よくよく両者の内容を検討すると、そのつながりが見えてくる。

『赤と黒』の人物配置と『フェードル』の人物配置を比べてみると、ジュリアン-レナール夫人-マチルドがイポリット-フェードル-アリシーに対応することが分かる。両作品の恋愛ドラマの基本構造は、いずれも、男性主人公-一年上の母親的女性-主人公と同年代の若い女性、という三角関係である。そして、男性主人公と母親的女性の死で終わる結末も共通である。もちろん、恋愛の内容には大きな相違がある。フェードルのイポリットへの思いを、イポリットは最後まで拒否し、アリシーだけを愛するのに対して、ジュリアンは、レナール夫人からマチルドへ、そして再びレナール夫人へと、その愛の対象を移していく。しかし、姦通を意識してからのレナール夫人の、キリスト教信仰ゆえの罪悪感の激しさは、近親相姦の罪の意識におののくフェードルの姿を思わせずにはいない。『フェードル』は古代ギリシャを舞台にしているが、主人公フェードルの罪意識が非常にキリスト教的(ジャンセニスト的)であることは、初演当時から指摘されていた。恋人が自分の息子の父代わりになってほしいと願う点も、レナール夫人とフェードルに共通する。また、母親的女性の振る舞いが、男性主人公の死のきっかけになるという点も、『赤と黒』と『フェードル』に共通である。レナール夫人のラ・モール侯爵宛のジュリアン告発の手紙は、フェードルのテゼーに対するイポリット告発に対応している。したがって、作品中に明確に語られてはいないが、ジュリアンと結婚することになったマチルドに対するレナール夫人の激しい嫉妬の感情、そこから派生したジュリアンに対する殺意が、ラ・モール侯爵宛の手紙の本当の原因ではないだろうか。だから、獄中のジュリアンに面会に来たレナール夫人が、フェードルそっくりの台詞を吐くのは、決して偶然でもなければ、場違いでもない。ジュリアンとレナール夫人の関係の背後には、イポリット-フェードルという実現しなかった恋人関係が存在する。だから、国王のヴェリエール訪問のエピソードにおいて、親衛隊の一員となって騎乗するジュリアンの後をレナール夫人が馬車で追う際に、戦車に乗ったイポリットを思うフェードルの台詞の一部が現れるのだ。『フェードル』では成就しなかった母親的女性と男性主人公の恋を成立させ、若い女性主人公の役割を拡大すると、『赤と黒』になるのではないだろうか。一見脆弱なイポリットの性格の特徴は、「傲慢」orgueilであり、これもジュリアンの特徴と一致する。『フェードル』との類似点を探ることによって、『赤と黒』に新しい光を当てることが可能となるように思われる。

ジュリアン・ソレルの狙撃について

柏谷 祐己

ジュリアン・ソレルはなぜレナル夫人を狙撃するか。これを「説明」するために、彼の狂気を示唆する記述を引き合いに出したり、登場人物としての自由を云々したり、モデルと目されるアントワーン・ベルテの狙撃事件との関係を議論し始めてしまうと、結局「小説内登場人物としてのジュリアンの心理を首尾一貫させる原理を見つけることを断念する」と言っているのと同じにしかならないように思われる。またこの種の議論は『赤と黒』の中のつじつと合わせにしか役立たず、“Stendhal Club”の「外」に対して力を持ちえない。常に、そして特に1996年の現時点では言説を「外」に納得してもらうこと、牽強付会でなく「それが必要ならば」「外」を魅了するようにすることが問題なのである。

狙撃に向かうジュリアンの性格について合理的解釈が可能であるという論者はもちろん大勢いるのだが、テキストに即し、射程を遠くにとって以下のような解釈を提案したい：

レナル夫人の手紙を見せられるまでジュリアンは、行為の上では「真の愛に生きる純粋な青年」か「偽りの愛を道具に社会をのし上がろうという悪辣な男」か、どちらでもありうる両義的な存在だった。夫人の手紙を見せられてどちらかに決定しなければならなくなった。ジュリアンは当然のこととして前者を選んだ。彼は、自らが優れた人間であることを事実で示すため立身出世を志向し、そのためにはどのような手段も恐れずにとるということこそ英雄的であり、高貴さ、強い精神力を証明するものだと思っていたのである。だから「おまえは道徳的に墮落した人間だ」という非難など全くの中傷にしか感じられず、激しい怒りを覚える。夫人を誘惑するときに確かに彼の頭に浮かんでいた悪辣な考えのことは、彼の念頭にはなかった。またこのときジュリアンは自分の置かれた状況に、「ひどい侮辱を受けたから、復讐しなければならない」という様相のみを見ている。彼の狙撃は「自分を心から愛してくれた母のごき人を殺すという非人間的行為である」という様相も当然持っているのだが、これをジュリアンは「見まいとしている」、あるいは「見えない」。このことが狙撃を可能にしたのだ。

ここにおいては夫人が問題の手紙を「本気で」書いたかどうかさえ、ジュリアンには関心がないようにみえる。それは彼には察しがつくはずの真相——夫人は放っておかれるとトク坊さんにすがってたぶらかされてしまう人だということをジュリアンは経験済みで、よく知っているはずだ——もまた意識の外に追いやっているからである。彼の偽善は彼の誇り高さから発しているものであり、その誇り高さは問題の手紙の文面のような告発を、書き手の真意に問わず到底放置しておくことができない。ジュリアンはこういうことのできる、こういうことになってしまう心の持ち主なのであり、この心の動きは「自分で自分の自然な考えが『見えない』『見たくない』」という、スタンダールの作品に何度も繰り返し現れるテーマの一つである。彼は「自由」ではないのである。

ただこの心理が愛する相手を殺すことまで可能にするというのは確かに少し極端でありスタンダードもジュリアンがあまりにグロテスクに見えることを恐れたはずである。
"Irritation physique"だの"demi-folie"だのという言い方をするのはそのためなのであろう。つまり「狂気」は、狙撃自体が功利主義的に説明不可能だから導入されたというのではなく、ジュリアンの心理があまりに非人間的に見えるのを避けるために限りなくそれに近いものとして提示されるためにあるのだ。この"demi-folie"の状態が終わるとレナル夫人の生存を知るのが時期的に一致したのが「偶然」だというのは、ジュリアンには残酷なことだが、疑わしい。夫人の生存を知って、自らの行為が決定的に非人間的な様相を呈するのを見なくて済むことがはっきりしたからこそ、かたくなな「視野狭窄」から自らを解放する気になったのだ、と考える方がずっと自然である。後になってから彼は突然「もし夫人が死んでいたら自分は――ちゃんと――自殺していただろうか」、言い換えれば「自分が『正気』だったら、夫人を殺してなおかつ自殺する気がないような人非人ではなかっただろう、というのは確実だろうか」という――スタンダードの好きな条件法の――自問にとられるが、この思考はすぐに「処刑される前に今自殺するか」という自問にすりかわってしまい（こっちの問題を考える方がずっと気楽だ）前の問題には結論が出されずじまいである。明らかにこの問題をジュリアンは直視できない、直視したくないのである。

"Irritation physique"だの"demi-folie"だのという表現、馬車の中で手紙がうまく書けなかったことなど、狂気とも正気ともとれる記述によってスタンダードが志向しているのはまさしく両義性そのものなのであり、読者もその両義性につきあわされている。しかし牢番との会話の冷静な様子などから、彼が十分に理性的であることを読者は察することができる。単に"folie"と書くことが作者にはできなかったということの意味をよく考えるべきである。

『赤と黒』は、スタンダードは、人間心理の特異な様相に光をあてることによってすさまじく現代的な問題をわれわれにつきつけているのではないだろうか。

国際学会：“Stendhal, imaginaire et politique”，

26-28 avril 1996, Herstmonceux Castle (Angleterre) 報告

柏谷 祐己

"Herstmonceux"というのはどう読むのかと駅前レストランの女主人に聞いてみたら、「ハーストモンスー」[ha:stmonsø:]だという答えでした。ロンドンから電車とタクシーで1時間半ほど、海もそう遠くない East Sussex にあるこの城がカナダ・クイーンズ大学に寄贈され国際研修センターとなったのは今から二年ほど前のことだそうです。ちなみにクイーンズ大学は関西学院大学とも交流提携をしており、その関係でここを訪れた関学生も既に何人かいるようですから、この英仏語混交といった感じの読みにくい名前もそのうち日本でおなじみになるかもしれません。

今春ここで開かれた国際スタンダード学会は、スタンダードにおける *inachèvement* の問題を扱った本の著者として有名なクイーンズ大学 Jean-Jacques Hamm 氏が中心となって企画されたものですが、到着して名簿を見てみたら参加者は40人足らず（日本からは筆者のほか柏木、下川両氏）、1日12本×2、5日=30本以上の研究発表が予定されていたわけですから発表する人の方が少ない人よりずっと多いのです！ 城の周囲は羊がのんびり草を食べているばかりで何も無いところであり、参加者はみな付属の宿泊施設に泊まり込み三食同じ食堂で食べるのですから――幸い牛肉は全然出ないねと皆笑っていましたが――日本語で言うとこれは「学会」というより研究「合宿」に近いものでした。

錚々たるスタンダリアンたちの中でわたしなどは最初肩身が狭い思いがしたのですが、疲れてくるとだんだんどうでもよくなってきていろいろな方とお話しするようになりました。スタンダード生き字引ぶりを発揮する老 Théodoridès 氏、引退して山奥に引っ込んでいる割には意外に若々しい Rannaud 氏、笑顔のチャーミングな Wahl-Willis 氏、奥さんと娘さんを連れてきた Nerlich 氏、カ

ントリーボーイ然としたPurdy 氏、などなど. . .

煉瓦造りの城の2階にしつらえられた研究発表会場では、初日トップのCrouzet 氏から最終日ラストのSerodes 氏まで、3本ごとにまとめて質疑応答と pause-café または食事というペースで進められていきました。欠席者もあり、後からGeorges Boulinier 氏がプログラムに加わり、結局最終的に発表は29本になりました。これらはもちろん後日 actes du Colloque として出版されるはずですが、どれもさすがに力量のある研究ばかりなのですが個人的には特に、人間がどれだけ歴史のmoteur たりうるかについてのスタンダードの見解を考察した Ancel 氏、急遽発表の Boulinier 氏による王政復古期の宗教秘密組織に関する研究などに興味を覚えました。

昼は、早く入れよという声に促されてCrouzet さんがやっと列に加わって記念撮影をしたり、夜は、最近 BBC が作ったテレビ映画『赤と黒』——ナポレオンがジュリアンにしか見えない亡霊として登場します！——のビデオを見て大笑いしたり。スケジュールがとどこおりなく終了すると参加者はバスに分乗、ベイリスト的よもやま話をしながらそれぞれ帰途につきました。

なお最近奥様を亡くされたせいもあり、もう完全に引退されるおつもりなのか、この学会には Del Litto 氏は来られませんでした。長年スタンダード研究をリードしてこられた先生の欠席は一抹の寂しさを感じさせるものでした。